

2位 千野寿子 喫煙歴 13年

仕事を終えてロッカーに向かう途中、「私たち、ちょっと一服して行くから」と言って喫煙所に立ち寄る先輩たちが格好良かった。

私が新人看護師として救急室に配属されたばかりの頃。今では考えられないことだが、当時は病院で医師や看護師が白衣のまま喫煙している光景というのは珍しくなかった。勤務中はバリバリ仕事をこなす先輩たちが、ちょっと気怠そうに煙をくゆらせながら立ち話をしている姿が妙に格好良く見えて、自分もその輪に加わりたくて、タバコを吸い始めた。「タバコ吸うようになったの？」と聞かれるのが気恥ずかしくて、最初の頃は喫煙所に行くのもちょっと緊張したものだが、徐々に“喫煙所仲間”が増え、仕事も楽しくなっていた。

喫煙所というのは、職種や立場などの垣根を超越した不思議な空間だった。工作中は顔を見るもの緊張してしまうような立場の人でも、喫煙所で会うと気さくに話しかけてくれた。新人の私に声を掛けて話を聞いてくれる先輩たちのタバコを吸う姿は、みんな格好良くて、優しかった。

数年後、健康増進法の制定を受けて病院の喫煙所は撤去されることになった。病院では一切タバコが吸えなくなったのだ。タバコが吸えないことも、喫煙所仲間との時間がなくなることも淋しかったが、時代はそういうことを受け入れる世の中になっていた。

その後、私は結婚を機に禁煙に成功した。元気な子どもも授かり、今年2歳になる。レストランでも禁煙席を選ぶようになった。それでも、ついたて越しにタバコの煙が漂ってくることもある。数年前までは自分も喫煙者だったくせに、思わず煙の流れて来た方をキッと睨みつけてしまう自分がいた。

喫煙所でタバコを吸う先輩たちは、格好良かった。だからこそ、タバコを吸う人はいつまでも格好良くあって欲しいと思う。不快な顔で睨みつけられる存在ではなく、憧れられる存在であって欲しいと思う。でもきっと、ついたてや喫煙室くらいでは、もうタバコを吸う人を格好良くすることはできないのだと思いながら、私は娘と手をつないでレストランの席を立った。